

脳内時空間研究¹⁾

——中国語文法“过”“着”との関連——

岡 原 翳 春

要旨

人間は五感を持ち、移動²⁾をし、外界の情報を脳内に取り入れ、脳内に「脳内時空間³⁾」を再構築する。この脳内時空間における観え方で様々な単語や文法を生み出す。脳内時空間では「時」などの抽象物も可視物であり、そこでの「観え」を基に「時」に空間位置表示語を付ける。人間は前方に移動する為、風景が前から後ろに向かって動く為「対象が自分の前方から接近し、身体の周囲を通り、後方へ過ぎ去る」という脳内映像イメージを持つ。この《前方からイベントが身体を通過=経験》という認識から、“V+过”で「経験」を意味する文法が生み出され、また《イベントが身体に付着=持続》という認識から、“V+着”で「持続」を意味する文法が生み出された。

はじめに

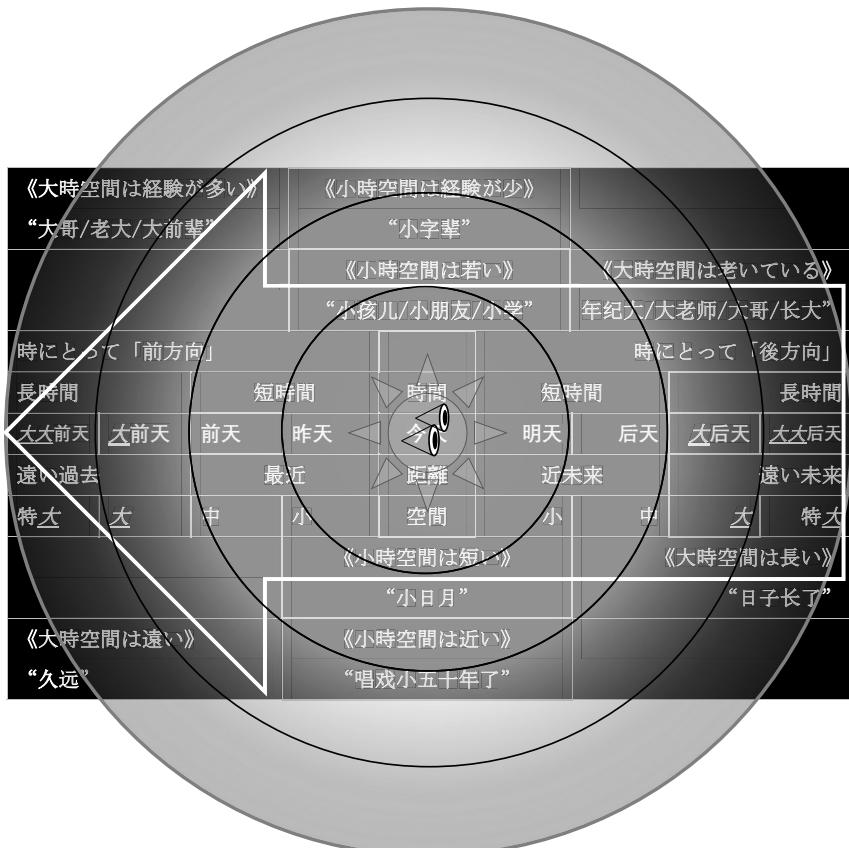
これまで筆者は認知言語学的アプローチで中国語を研究してきた。しかし、本論では脳内時空間研究的アプローチで研究を進める。つまり、脳内時空間における3次元的な観え方や感覚、また身体感覚や身体経験が文法生成において影響を及ぼしていることを述べ、脳内時空間とアスペクト(“过”“着”)、すなわち文法との関係性を観察する。

1. 0 先行研究

1. 1 脳内時空間における「観え」と「形」と「単語」と「メタファー」

我々の脳内には、視覚記憶を基にした映像的な、空間と時が融合した様な場が有る。例えば、我々が自宅から勤務先までの道順を思い出す時、脳内で映像的に(正確ではなくても)再生して観ることができる。こうした、我々の脳内に存在する、視覚を基にした空間と時が融合したような映像的な場を、筆者は「脳内時空間」と名付けている⁴⁾。これまで脳内時空間での観えが単語やメタファーを生み出しているという実例を示してきた⁵⁾。

図1 脳内時空間における観えとメタファー及び単語の関係図(岡原 2016b)



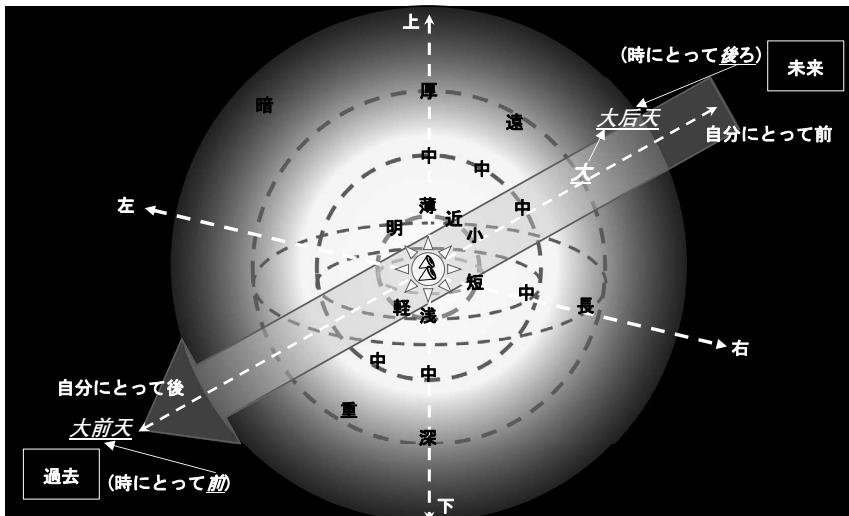
脳内時空間研究は、「我々の脳内時空間における[A]という観え方が[B]認識や[C]メタファーや[D]表現を生み出した」という根本原因究明型の研究である。⁶⁾

例えば“前天”や“后天”などの単語は脳内時空間での観えが生み出したと考える。脳内時空間では「心」や「時」等の抽象物も具象物のように「観え」る(岡原(2012b))。「時」はまるで向かい風のような方向に自我の「前方→後方」へ移動するように動いて「観え」る為、過去は自分にとっては「後ろ」だが、向かい風にとって、つまり時間の進行方向においては「前方向」に当たるので、脳内時空間においての「時」の観えが“前天”という表現を生み

出したという主張である。

また、自分から遠くなると脳内時空間のサイズが大きくなる。大・中・小のうち脳内時空間の大サイズの時空間が「大前天」という表現を生んだと考えられる(岡原(2016b))。

図2 脳内時空間の形、そして方向性と単語と関係⁸⁾(岡原(2016b))(筆者一部加筆)



1. 2 「松明の原理」

Lakoff & Johnson (1986:77)では《理解することは見ることである》という認識を提示している(例えば“你看如何”的“看”、英語の“Do you see what I mean?”の“see”、日本語の「君はこれをどう見る?」の「見る」は「理解」という意味)。

さらに、Lakoff & Johnson(1986: 46)は《視界は容器である》という認識を指摘している(“視界/眼中” “The ship is coming into view”「視界に入る」等の表現の背後にこの認識がある)。

レイコフは「視界」 = 「理解」と指摘した。そして「容器」は「一定範囲」の境界線を持つ。よって、次のことが導き出される。

《視界の容器(一定の範囲) = 理解の容器(一定の範囲)》 — (Cf. 岡原 2015)

この認識から、以下の認識が導き出される。

《視力が及ぶ範囲は理解が及ぶ範囲である》 — (Cf. 岡原 2015)

《視力が及ばない範囲は理解が及ばない範囲である》

— (Cf. 岡原 2015)

これらの認識は、目を開ければ見え、目を閉じると見えないと身体経験が生んでいる。

さて、我々人類の「視覚」は、「光」を受けて外界を「見る=理解」することができる。

しかし目は「受容体」であるのに、「目を光らせる」「眼光/目光」「目光炯炯射人」「眼光短浅」「She shot me a hard look.」などの表現がある。これらの表現には次の認識がある。

《THE EYES ARE LIGHT SOURCES》《視覚（=目）は発光体である》— (Cf. 岡原 2015)

また新たに次の認識が確認される。

《CONSCIOUSNESS, UNDERSTANDING and LIGHT EMANATING FROM EYES》

《意識、理解、光は目から出る》

これらの認識は「目を使って外界を理解しよう」という積極的意思が生んだのかもしれないが、いずれにせよこれらの認識を纏めると「理解」に関して次のように図示できる。

図3 「光」と△「理解」のグラデーション的広がり (岡原(2015))



さらに言えば、次のような図になる。

図4 「理解」が松明の光の様に広がる図 (松明の原理) (岡原(2015)) (筆者加筆)



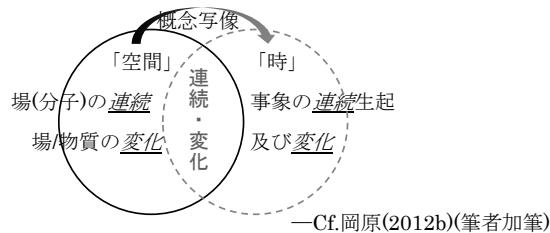
この認識のグラデーション的広がりは、まるで暗闇の洞窟の中で松明を持って火をかざしているかのような広がり方であるため、筆者はこの認識の広がり方を「松明の原理」と名付

けている(Cf. 岡原(2015))¹⁰⁾。

1. 3 「空間」から「時」への概念写像

具象物を使って抽象物を表現する際に必要なのは「共通項」である。「時」の表現は「空間」の位置表示語が多用されるが、それを可能にするのは「連續」と「変化」という共通項である。

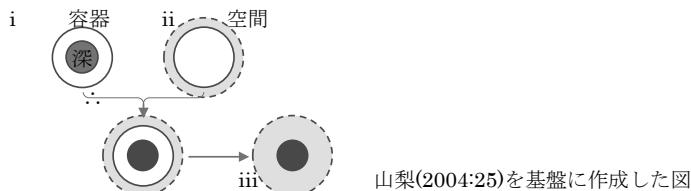
図5



1. 4 メタファー継承

下位に属する存在は上位の概念を継承する(概念(≒メタファー)継承)(Cf. 鍋島(2011:95-96))。

図6 [空間] \ni [容器]/[空間位置表示語]など



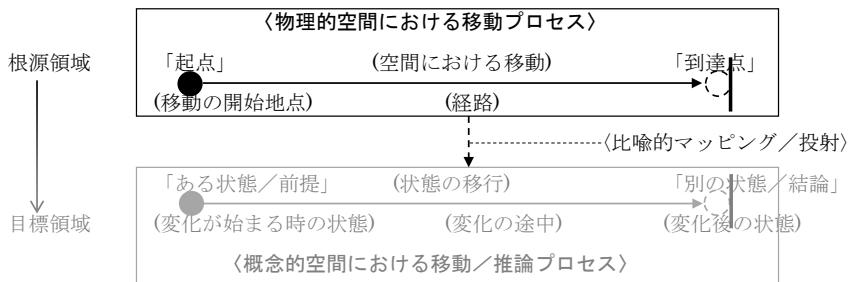
つまり、空間に存在している物体が「時」へと概念写像がされた場合、空間におけるそれぞれの特徴を引き継いで「時」の表現となる。

- | | | |
|---------|---|--------------------------|
| 例) 川の流れ | → | 時の流れ |
| 川をさかのぼる | → | 時をさかのぼる |
| 容器の深さ | → | 深夜/深秋/深冬 (Cf. 岡原(2015)) |
| | | 秋深し/ the deep past(遠い過去) |

1. 5 「移動」 ⇄ 「変化」

次の図1のように、移動は変化であり、変化を考察する時、移動で考察すると分かり易い。

図7 (●は Trajector(=移動体))

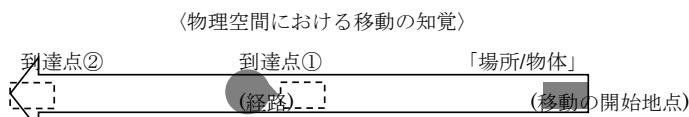


Cf. 粕山(2010:83:1.24-30)と山梨(2004:28 図6)を筆者が混合・加筆した図「五感」を持っていいる人間は「移動」し、それを概念的空間の移動や推論(=変化)のプロセスへと写像する。なお、この図は「自分が前方へ移動し未来のイベントへと接近する」ことを前提としていると言え、のちの図1-1でも見るよう、現実とは異なる。

2. 0 前方移動=事態の同時双方向変化

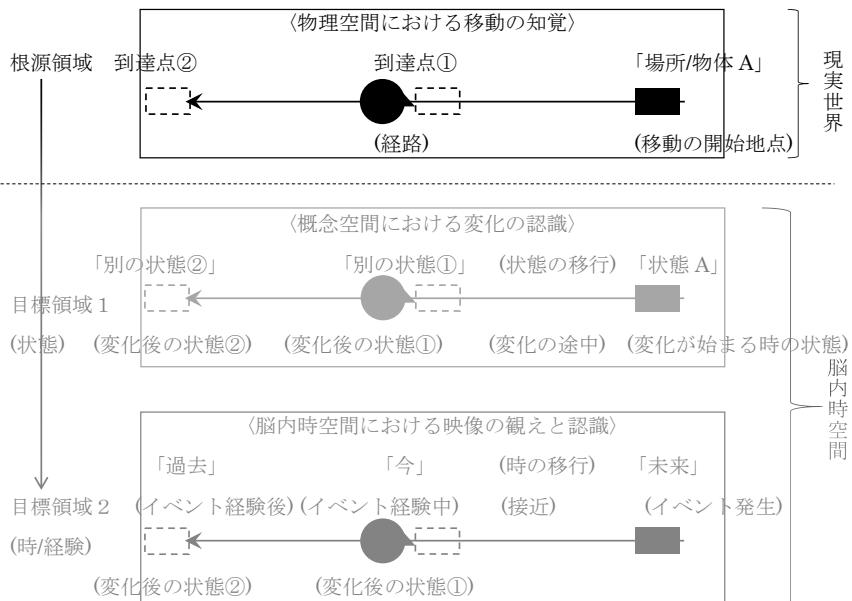
上出図7は自分が前方へ動いた時の「状況」を述べたものである。一方、我々は風景が主体的に前方から後方に向かって動いているかのように「知覚」する(Cf. 山梨(2004:12))。つまり、図8のような事である。

図8 (■は Landmark-Trajector(=場所／物体) / ● Trajector(=移動体))



我々は前方へ動くと、前方にある「場所/物体」がまるで主体的に自分へと接近し、そして接触し(到達点①)、自分を通過し、後方(到達点②)へと至る、ように知覚する(例: 電車の先頭車両(車掌目線)で前方を見た時)。我々の脳内時空間には「前方の風景(=場所/物体)が自分の前方から接近し、後方へと過ぎ去る」映像が蓄積されている。またこの移動／知覚経験は「状態」や「時・経験」という目標領域へも写像される。

図9 物理空間から概念空間および脳内時空間への写像



例えば「迫りくる期限」等の表現はこうした過程を経て生まれる。重要なのは、我々の脳内時空間には「イベントは未来に現れ、接近し、自分を通り過ぎ、過去へと進む」という映像イメージが有ることである。

しかしながら、現実の時の流れは人間の認識とは異なり、前方へ移動せずとも時は過ぎる。つまり、身体移動と時の経過は根本的に無関係であり、実は次の図10の認識さえ人間の勘違いでしかない。

図10 現実とは異なる「時の認識」

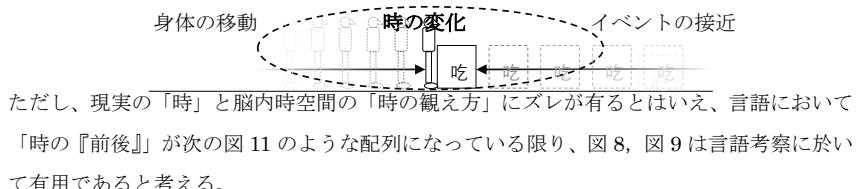
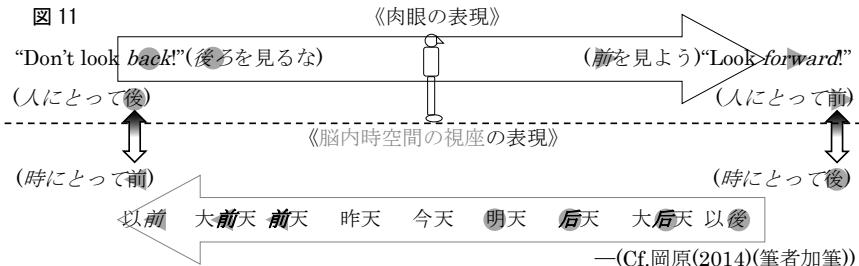


図 11



—(Cf.岡原(2014)(筆者加筆))

レイコフらは〈時間は動いている物体である〉及び〈時間は静止物体である〉。我々が時間の中を動いていく〉という「発想」が根本にあると指摘した(G.Lakoff, M.Johnson(1986))が、本論は、「肉眼での見え方」と「脳内時空間での観え方」の二つが存在し、これら異なる二つの「実際のミエカタ」が「前後真逆」の方向性の単語を生んだと主張する。つまり、発想が先に有るのでなく、ミエカタが先に有ると考える。

以下では、「移動」経験を基にして得られた「脳内時空間の観え方」がどのような形で中国語文法に反映されているかを考察する。

3. 0 アスペクト=状態の変化(=物質の移動)

“过”“着”などアスペクトは、「状態の変化」とも言える。上述通り、「変化」は「移動」であるため、以下ではこれらの状態の変化を上出の図に当てはめ、また脳内時空間における観えと文法との関係を考察する。

3. 1 “过”について

ここでは「経験」を表す「動詞+过」について観察する。“过”的基本となる動詞的中核義は「(場所を)通る, 通過する」である。次のようなイメージである。

図 12 (道/川などの障害物を横切る)

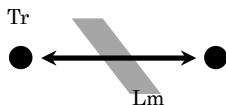
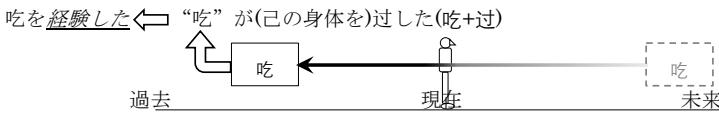


図 12' (Cf. 丸尾(2014:105-123))



移動体(Tr)の動きは 1.3 の「概念写像」と 1.4 の「メタファー継承」を経て、図 8, 図 9 の解釈が導入される。図 8 で示した様に、未来で発生したイベントが自分の前方から自分に向かって接近し、自分を通り過ぎ、自分の後方へと進む。

図 13 《脳内時空間における観えの“过”の文法化》



出来事(ここでは“吃”)は未来に発生する。発生した時点(未来)では現在の主体はまだ“吃”という行為を行っていない。それが徐々に主体に接近→主体の身体を通過→後方へ過ぎ去る。「物体が身体を通過=経験」という認識は日常的な「移動経験」や、人間が一生涯行う「飲食」という日常的な身体経験等からヒントを得た可能性が考えられる。図 13 に示した脳内時空間における観え方と、身体経験が混合して《イベントが身体を通過=経験》という認識へと変化し、“V+过”で「経験」を意味する文法を生んだ可能性が考えられる。

また、“过”的「経験」は、前方からイベントが自分に「到達」するという側面がある(図 10、図 13 参照)ため、『過去における』経験と同時に、単に「ある状態への到達／獲得」という意味も持つのはその為だと考える。単なる「到達／獲得」を表すマーカーの場合、意味用法は過去の事柄に限らない。

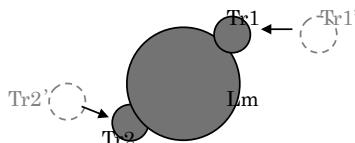
- (1) 洗过澡再吃饭。/赶到那儿，第一幕已经演过了。/ 等我问过了他，再告诉你。
(Cf. 『中日辞典』(-过))(下線・斜字筆者)

3. 2 “着”について

ここでは「持続・継続」を表す“動詞+着”(「…ている」「…しながら」)について観察する。

まずは元々の“着”(zháo)の基本となる動詞としての中核義は「接触」であるが、重要な前提として「乖離状態」が存在している為、「乖離からの接近」の最終到達点／形態としての「接触」と捉えた方が良い。次のようなイメージになる。

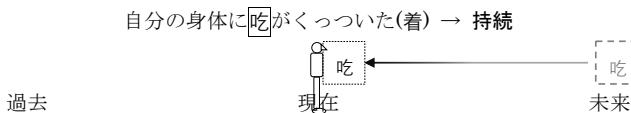
図 14 “着”的イメージスキーマ(「→」は移動を示す)



移動体(Tr)の動きは 1.3 の「概念写像」と 1.4 の「メタファー継承」を経て、図 8、図 9 の解釈が導入される。図 9 で見た様に、未来で発生したイベントは自分の前方から自分に向か

つて接近し、自分に到達する。

図 15 《脳内時空間における観えの“着”的文法化》



“吃”というイベントが未来に発生し、それが次第に主体に接近し、自分に到達(接触)する。そして、他の要因が無い限りそれ(接触した状態)は続く(Cf. 鍋島(2011:61))¹²。「物体が身体に接触=継続」という認識を最も想起させやすい日常の行動は、生涯通して行う「着衣」の可能性が考えられる。着衣経験と図 15 の様な脳内時空間における観えが混合し、未来から接近してきた「動詞(イベント)」が自分の身体に接触→「継続」という認識が生じ、“V+着”で「継続／持続」を意味する文法に発展したと考えることができる。

尚、乖離状態で分からぬ事は、接触(=到達)した結果それを理解できる事がある。そうした身体経験が次の、結果を表す「…してみると…すると」意味用法に現れていると考える。

(2) 看着不訓眼。 / 这东西拿着太重。 / 说着容易，做着难。

(Cf. 『中日辞典』(下線筆者))

4. 0 脳内時空間の特徴

脳には様々な情報が満ちているため、「情報空間」と言われる場合もある。本論の「脳内時空間」は簡単に言えば、情報空間のうち、目を閉じて観える全光景である。筆者はこの空間と時間が混合した場の事を筆者は「脳内時空間」と呼ぶことにしており、上述したように脳内時空間における「観え」が全言語の文法、単語、表現の生成における極めて大きな原因であると考える。尚、筆者が考える脳内時空間の特徴は以下の通りである。

《映像について》

- 好きな場面や対象を自在に見る・思い出す・想像することが可能。
- 肉眼で見たことが無い対象であっても、肉眼で見たことがある映像素材を駆使して「観る(=創造的想像)」ことが可能。
- いま、肉眼では見えない対象(例：過去の記憶/時)を可視化(思い出す/想像)が可能。
- 脳内に於いて抽象物と具象物は同質の存在であり、同質に扱える。
- 脳内に於いては「時」も可視物(具象物)。

- 脳内に於いて「空間」と「時」は分離させて観ることができる。

《再生速度について》

- 脳内映像の一時停止、スロー、普通、早回し等、再生速度の調節が自由。

《映像の切り替えについて》

- 脳内映像を単数対象一括的事態把握(S' -mode)¹³⁾して、場面の微視(=ズームイン)が可能。尚、無限小の世界まで一瞬でズームインできる。

- 脳内映像を複数対象連続的事態把握(O' -mode)して、場面の巨視(=ズームアウト)が可能。尚、大宇宙のさらに無限の外側まで一瞬でズームアウトできる。

- 視座の瞬時の移動(=場面の変換)が自由。

- 重力と無関係。現実ではあり得ない場所から(例えば対象を上から)見ることが可能。

- 物理的な摩擦や空気抵抗など一切無く、物理空間では不可能な移動が可能。

- 脳内での観えは心理状態に影響する。

《大きさについて》

- 脳内視座を中心に極小～極大サイズの時空間がある。

- 無限小まで縮小でき、また大宇宙よりも大きく拡張できる(伸縮自在)。

- 認識が脳内視座から外に向かって広がる、認識の「松明の原理」が存在する。

《言語との関係》

- 言語(単語、文法、メタファー、表現)を生み出す直接的な根本要因である。

まとめ

これまで筆者は、認知言語学的アプローチで中国語の空間表現や時の表現を研究してきた。しかし研究が進むにつれ、従来認知言語学で言われてきたような身体経験と言語の関係性¹⁴⁾だけでなく、「『脳内時空間』における実際の観えと身体感覚/経験」がメタファーを含む言語生成に影響を及ぼしているという研究結果が出て来た。次第に筆者は「『脳内時空間における観え』と「言語」が全く関連の無い別の体系で存在しているのだろうか」「相互影響が無い方が不自然だ」と考えるに至った。

本論は、脳内時空間における3次元的な観え方が文法生成に於いても影響を及ぼしていることを述べた。例えば本論で挙げた中国語アスペクト表現の“过”“着”は日本語には無い用法であるため、外国人学習者にとってはわかるようなわからないような文法であり、丸暗記せざるを得ない。しかし、仮にこの文法が、中国人が「移動」という身体経験と脳内時

空間での観えをもとに作られた文法であるとしたら、同じ人間として「移動」という身体経験と脳内時空間での観えを持つ全ての外国語母語話者も、用法を真に理解し、応用できる可能性が高くなる。つまり、文法化の過程が分かれば学びやすくなると考えるのである。

本研究は認知言語学を基盤としてはいるが、従来の認知言語学的研究手法とも、中国語学的研究手法とも異なった、脳内時空間の観えと言語の関係を探る新たな領域を切り開いた、芽生えたばかりの未知の分野の研究であると言える。

課題は山積しているが、今後この取り組みを「脳内時空間研究」と名付けて研究を進めたいと考えている。

参考文献

- 荒川清秀(2010).『一步すすんだ中国語文法』.大修館書店.東京.
- 北京对外貿易大学・北京商務印書館・小学館(編)(2001)『中日辞典』.小学館.東京.
- G.Lakoff, M.Johnson(1986)(渡部昇一他訳).『レトリックと人生』.大修館書店.東京.
- 胡振剛(1997).「中国語のアスペクト助詞「着」について」.長崎ウエスレヤン短期大学紀要 第 20 号.諫早印刷株式会社.長崎.
- 稻垣智恵(2017).「新興語法 "V 着" に関して:《二十年目睹只怪現状》の例を中心に」.関西大学東西学術研究所紀要第 50 輯.遊文舎.大阪.
- 丸尾誠(2014).『現代中国語方向補語の研究』.白帝社.東京.
- 宮崎清孝, 上野直樹(2008)『視点(コレクション認知科学 3)』.東京大学出版会.東京.
- 糸山洋介(2010).『認知言語学入門』.研究社.東京.
- 鍋島弘治朗 (2011).『日本語のメタファー』.くろしお出版.東京.
- 長山泰久(編)(1992).『空間移動の心理学』(応用心理学講座 6).福村出版.東京.
- 岡原嗣春 (2012b).「異言語間に見る「時空」認識メカニズムの研究—認知言語学的アプローチー」.博士学位論文.関西大学.
- 岡原嗣春(2014).“对形象的主观/客观的事态把握和“左右””.“海外汉语方言暨世界汉语教育史”国际学术研讨会论文集.北京外国语大学/暨南大学/深圳大学.
- 岡原嗣春(2015).“程度/时间/色觉/味觉/嗅觉/理解/关系/罪 和“深”的关联”.『中国語文法研究』2015 年卷. 中国語文法研究会.朋友書店.京都.
- 岡原嗣春(2016a).「主/客觀的事態把握の再考—無限に広がる視座の階層—」. 関西大学.中國文學會紀要第 37 号.遊文舎.大阪.

岡原嗣春(2016b). “时间的大小”.中山大学.汉语教材史国际学术研讨会—世界汉语教育史研究
学会第八届年会.

須佐見憲史(1994).「奥行運動残効に及ぼす相対運動の時間・空間的効果：視聴覚技術」.一
般社団法人映像情報メディア学会.テレビジョン学会技術報告 18 号.東京.

山梨正明(2004).『ことばの認知空間』.開拓社.東京.

山梨正明(2012).『認知意味論研究』.研究社.東京.

《本論に関連する口頭発表》

岡原嗣春(2012)“脑内“时空间（时间和空间）”的方向--在脑内可见的“TIME””.3rd Cultural
Interaction and Language Contact. Università degli Studi di Roma "La Sapienza"

岡原嗣春(2016d).「容器の認識と松明の原理から見る“大”的強調の意味」. 日中対照言語学会
第 36 回大会(2016 年度冬季大会).大阪産業大学梅田サテライトキャンパス.

注釈

- 1) 本論は脳内時空間と中国語「文法」の関係を述べたものである為、論題を「脳内時空間と文法」としても良かったのだが、筆者のこれまでの研究で脳内時空間は中国語母語話者および他言語母語話者の文法、単語、派生義、またメタファーの生成でも関係が確認されているだけではなく、認知科学系の様々な分野、また知覚工学(3D ディスプレイ)やライフサイエンス等様々な分野においても共通性が見られ、「脳内時空間文法」や「脳内時空間言語学」では收まらないほど汎用性が高いと考えている。脳内時空間の研究は今後様々な分野に寄与する基盤研究となると考えており、今後の研究の発展の範囲を限定しないためにも、論題を「脳内時空間研究－中国語文法“过”“着”との関連－」とした。
- 2) 長山((編)1992)では、衣食住は人の基本 3 大要素であるが、「移動」も加えなければならぬとする。
- 3) 例えば、3D 技術を駆使し、街中の風景を正確に再現しているテレビゲームは、3D の街中でキャラクターを移動させてその風景を楽しむことができる。筆者の知人はこうした系統のテレビゲームが好きで、実在するある街並みを舞台にしたゲームでよく遊んでいた。地方から来た彼を実際のその街に観光案内した所「この街を良く知っている。右に曲がると○○が有り、左には○○がある。」と言うので来たことがあるか尋ねると、「ゲームで來たことがある」と言っていた。仮想空間は脳内時空間とよく似ていると言える。
- 4) 岡原(2012),(2014),(2015),(2016b),(2018),

及び学会発表(岡原(2012),(2013a),(2013b),(2014a),(2016d),(2019),(2021))。

- 5) 図 11 に一部書いたが、「肉眼からの見え」が生んだ表現と「脳内時空間の視座からの観え」が生んだ表現の 2 種類があることが分かる。実線部分は前者、点線部分は後者の表現。

在过去	別向后看	現在	要向前看	展望未来
回忆过去	倒退的看法	当下	前途宽广	面向未来
后方	后路	当时	前线	最前线
The past	Don't look back	At this moment	Look forward	The front
自我の後方は過去				自我の前方は未来
過去	脳内時空間に於いて「時」は具象物『時の流れは向かい風』			未来
時にとて前方は過去		時にとて後方は未来		
Me before you	The day before yesterday	Today at, on the day)	The day after tomorrow	Day after day This will last about 3 years.
以前	大前天	前天	昨天	明天
先日	从前	午前	中午	午后
起先	前人	先例	先人	同辈
				绝后 后辈 晚辈 后进 后来

—Cf.岡原(2014)(筆者加筆)

よって、後者の単語や表現は、脳内時空間における観え方をそのまま言語化しただけであると言えるため、メタファー(隠喩(分かり難い比喩))ではない可能性がある。

- 6) 脳内時空間では抽象物をあたかも具象物のように観る事ができ、「時」や「心」さえ具象物扱いする。観えているから、いわゆる「存在／容器のメタファー」的な種々の表現を生んだと考える。

- 7) 本論は「我々「移動」する生物が前方向に移動すると周囲の風景が後方に流れて行く脳内風景を単に言語化しているだけである」と主張する。レイコフらは「二つの方向性の時の流れ」を指摘したが、筆者は長山((編)1992)を参考に「移動」がその理由であると指摘し(岡原(2012b))、更に《時の流れは向かい風》という認識の存在を確認した。そして重要なのは、脳内時空間において「時」は「可視物」であるということである(岡原(2012b))(我々の脳が抽象物(肉眼で見えない)を観る能力を有するからこそ、建築家、映画

監督、小説家、漫画家などの職業や将来の予定が成立するのであろう)。実はこれは「存在のメタファー」の否定に近い。存在のメタファーとは、出来事や活動、感情や考えを、存在物や内容物としてとらえる観方である(G.Lakoff, M.Johnson(1986))が、抽象物をあたかも具象物のようにわざわざ表現しているのではなく、脳内で抽象物が可視化し、抽象物が「観えて」いて、その観え方を素直に言語化しているだけであるならば、メタファーではないからである。

- 8) この形について、故・須佐見憲史教授から、ご専門であった知覚心理学、知覚工学、3D サイエンスとの共通点の多さをご生前にご指摘頂いた。脳内時空間の研究は言語学、文法、語彙の研究、また認知科学のみならず、その他の学問分野との共通点が多いと考えられ、極めて汎用性が高いと思われる。また、筆者は 2006 年～2010 年にかけて、16 カ国、合計 80 名の被験者を対象に確認した所、79 名の被験者が同じ未来と過去の方向性を持っていた。脳内時空間の広がり方と脳内における時の流れる方向は、中・英・日本語だけでなく、仏・伊語等ラテン語系や、その他アラビア語にも共通性が認められた。こうした事から、脳内時空間研究はその他多くの言語研究でも基盤研究になると筆者は考える。
- 9) 今後の研究対象とする。
- 10) これは「静止している時空間を光る眼で見ている」状態での図で、起点は「自己」であり、対象も動いていない。実は、もう一つ違う「松明の原理」がある(岡原(2016)口頭発表)が、文字数の関係上、今回は取り上げない。
- 11) 例えば現在を昼食前の午前 11 時 30 分だと仮定する。昼食を何にするか迷っている場合、昼食(=未来のイベント)は決定しない。しかし「カレーを食べる」と決めた瞬間、未来において「カレーを食す」というイベントが出現する。主体は「カレーを食す」イベント発生に向け一定以上の強さの欲求を持って行動すると、時の流れと共にイベントが自分に接近し(自らカレー店に赴き)、カレーを食すイベントが実現する。カレーを食べた後は、その昼食は過去の出来事になる。つまり、一般的に人間は図 7 のように「時」を過去からの延長と捉えているのだが、実は図 10 のように未来は過去とは無関係で(不慮の事故や病気、自然災害、寿命以外は)、現在の自分の欲求・決定が未来を創造することが、言語表現から見てわかる。人間は、他者が決めたイベントも含め未来に発生したイベントが自分に接近すると捉えている。
- 12) 次を参照：
物体は、OBJECT という名称で Johnson の IS リストにも登場する。今井(1997:23)

によれば、スペルキー(Spelke,1990,1991)やバイヤルジョン(Baillargeon,1987;Baillargeon et al.,1989)は、乳児(一歳未満)が、物体(object)に関して、以下の(i)～(iv)のような基本特質を理解していることを記述している。

- (i) 物体はそれ自身では動けず、他の力によって動かされない限り、同じ場所に存在し続ける
- (ii) 物体は別の物体を通り抜けできない、つまりある物体が壁などに突き当たった場合、壁に穴を開けて突き通さない限りは壁の前で運動が止まってしまう
- (iii) 物体は他の力を加えられない限り、自分自身でその形を変えることはない
- (iv) ひとつの物体は全体がまとまって同時に動く(つまり物体の一部をつかめば全体がついてくる)

(今井,1997:23)

これは物体の素朴力学理論と呼ばれる。

— Cf. 鍋島(2011)(下線筆者)

“着”は動きの静かな動詞と相性が良い(荒川(2010))とされる。接触したらあまり動かないと捉えているからであろうか。尚、静態存在文および動態存在文については胡(1997)、新興語法については稻垣(2017)を参照のこと。

13) 池上(2003-2004,2009)が主張した客観／主観的事態把握に対し、鍋島(2011)は客観的事態把握を「神の視点と呼べる」とした。筆者は、客観的事態把握でさえも「自己の視点から事態を把握したもの」と考え、対象の単／複数から問題に迫り、「単体対象一括的事態把握」を「S' -mode」、「複数対象連続的事態把握」を「O' -mode」と再定義した。またこれらを「現実(Reality(R))」、「記憶(Memory(M))」、「想像(Imagen(I))」、「想像の登場人/物(Character(C))」において行う事を述べ、最低でも 14 種の把握法の存在を指摘した。すなわち、R-S' /M-S' /I-S' /I-C-S' /I-C-M-S' /I-C-M-C-S' -mode 、及び R-O' /M-O' /I-O' /I-C-O' /I-C-C-O7/I-C-M-O' /I-C-M-C-O' -mode である。またさらに I-C-M-C-M-S' /O' -mode や I-C-M-C-M-C-S' /O' -mode のように、事態把握が無限に増えることも確認した(Cf.岡原(2016a))。ちなみに“前/后天”は I-S'-mode、“上/下个星期”は I-O'-mode の単語である。

14) 認知言語学のアプローチは、言語主体の想像的イメージ的能力とこのイメージ能力を支える身体的な経験との関連で、言語の発現と分節化のプロセスを根源的に問い合わせていく立場をとる。言語は、人間の進化における単なる知性の産物ではなく、生物一般の感覚・運動的な身体経験に根差す認知能力(特に、認知能力の中核を成す想像

的イメージ能力)を不可欠の前提としている。想像的イメージ能力が、言語能力の根源的な基盤として日常言語の発現を支えている。認知言語学は、この言語観に立脚している。この点で、認知言語学のアプローチは、言語の感性的な側面を重視する言語学のアプローチと言える。このように言語の感性的な側面を重視すると言うと、言葉への形式的アプローチをとる言語学の立場から、言葉の知性的な側面を軽視することを意味する訳ではない。これまで知的的とみなされてきた言葉の側面も、イメージ的経験(ないしは感覚的な経験)を反映する感性・身体性に基づく認知能力との関連で根源的に問い合わせていく必要がある。

—Cf.山梨(2012.pp49)(下線筆者)

筆者はこれまで認知言語学的アプローチで研究していたものの、「想像的イメージ能力」という表現だけでは收まらない「脳内時空間」というものを発見したため、根源的に問い合わせしていく「脳内時空間研究」を始めるに至った。

